

出席者と余り交わらないのが目につく。

トルコ人のインテリで政府の要職にあるSさんに、アラブ観を伺ったところ、ごたぶんに漏れず、アラブ人は嫌いだと言う返事が返ってきたので、その理由を尋ねてみた。Sさん曰く「トルコ人とアラブ人は性格が余りにも違いすぎる。むしろ彼らは自分たちとは反対の性格だ。トルコ人が勤勉なのに対しかれらは怠惰、自分たちが正直なのに対し彼らは嘘つき、自分たちは規律正しく時間を守るのに対し、彼らはルーズで時間を守らない、トルコ人の清潔好きにたいして彼らは不潔、それに何よりもトルコ人は信義を重んずるのに対し、彼らは人を裏切る。この最後の点が何といてもトルコ人のアラブ嫌いを決定的にしており、オスマン朝はアラブを植民地として治めたのではなく、イスラムの信奉者たる同胞として慈愛をもって受入れ、全く同等の帝国の一部として取り扱ってきたにもかかわらず、西欧帝国主義勢力が浸透しはじめるや、アラブ人達はこれと結んでトルコ人に銃を向け、多くのトルコ人を殺した

のである。」

Sさんの言は勿論えらく単純化した表現が用いられており、額面通りに受け取る訳にはいかないであろう。この性格の対比ではいいことばかりがトルコ人で、アラブ人については悪いことばかりが並べたてられている。しかしSさんの指摘は一般のトルコの人達が抱いているアラブ観をかなりの確に反映していることは疑いないのである。

トルコの新聞やテレビでもすぐお隣の国でありながら、アラブ世界のことはあまりニュースの種にならないし、番組が組まれることもない。日本のこととなると、社会面の些細なニュースから大相撲の様子までよく新聞にでると比べると大変な違いである。やはりトルコ人一般の関心がアラブの方にはさっぱり向いていないのである。

YAMAGUCHI Yōichi (1993): Sense of Belongings of Turkish People.

トルコ語とローマ字

トルコ語は1928年、アラビア文字から英・独・仏語を基本としたローマ字表記に改められた。言葉自体は日本語同様、ほぼ子音と母音のセットの続きからなる。そのためローマ字になれた人はトルコ語のほとんどを音読できる。表記上の親近性から、英字新聞・世界地図・名刺・文献引用などでトルコ語の固有名詞(人名、地名など)をそのまま英語文字で表現する例が多い。

トルコ語アルファベットは29文字で、それぞれに大文字と小文字とがある。以下にトルコ語つづりを音声化する場合、実際の音により近づけるための注意(ヘボン式ローマ字との相違点)を記す。

1. 独語表記からの借用。独語風に発音する。
 ü (ウの口形で「イ」と発音)
 ö (オの口形で「エ」と発音)
2. 仏語表記からの借用
 ç (ch の働きをもつ。例: çay 「チャイ」

なお仏語では s の働き)

3. トルコ語独自の表記

c (ローマ字の j の働きをもち、濁音となる。例: cami 「ジャーミ」)

ğ (軟らかの発音といわれ、その直前の音を心もち伸ばす働き)

ı (i の頭の点が落ちたもので、i 「イ」とは別音。背中をたたかれた時に発する「ウッ」の音。例: Topkapı 「トプカプ」。英語表記になると Topkapi となり、トルコ語発音との違いが生ずる)

ş (sh の働きをもつ。例: şişe 「シシェ」)

v (発音に濁りがなく w の音に近い。例: Van 「ワン」。ちなみにトルコ語アルファベットには w がない)

なお、トルコ語は“母音調和”が厳密で、たとえばア列を含む単語や句ではその次の母音つづりがア列かウ列となる場合が多い。(平野英雄)